

20世紀の3人の偉大な女性

質問： 死にゆく人たちのケアにたずさわった
20世紀の3人の偉大な女性とは？

答え： ノーベル平和賞、テンプルトン賞（宗教界のノーベル賞）を受賞した皆さまよくご存知のマザー・テレサ(1910-97年)。「死の瞬間」という本を著してテイヤール・ド・シャルダン賞を受賞したエリザベス・キュブラー・ロス博士(1926年-2004年)。テンプルトン賞と国家に功労のあった人に贈られるデйм（男爵夫人）の称号を受けたシシリー・ソンドース先生(1918年-2005年)です。今回は、現代ホスピスの創設者、シシリー・ソンドース先生の話をしていきます。参考文献：シシリー・ソンドース（シャーリー・ドゥブレイ著、若林一美訳、日本看護協会出版会、1989年）



シシリー・ソンドース先生

1. 生い立ち

1918年、成功した裕福なビジネスマンの家庭の長女として誕生（弟が2人います）しますが、母親が厳格でヒステリック、冷たい性格の女性で、両親のいさかいは絶えず、シシリーも母親とは不仲で、精神的に満たされなかった少女時代を送りました。「父は他人を元気づけ励ますことにかけては最高で、そのおかげで父のアヒルたちは、みんな白鳥になれたのです」と尊敬する父親に感謝の辞を述べています。シシリーは、大柄で、内気で、写真撮影を拒み続けましたが、身体も心も大きかったシシリーは、

「どうも私は大きすぎて、自分自身につまづく



ことに時間を費やしすぎたようです」と自己分析しています。ナイチンゲール看護学校に入学しますが、持病の背骨の痛み（脊椎異常彎曲症）で看護婦を一時期断念して、背骨の手術を受けました。

看護学生時代の
シシリー

2. 人生の大転換期

1945年6月から9月の間、そんなシシリーに人生の大転機が訪れます。看護婦と医療ソーシャルワーカー（SW）の学位と資格の取得、両親の別居、キリスト教への改心。不仲な両親の別居に心痛めたシシリーは、1945年の夏、福音主義派の合宿に参加しますが、礼拝の時、「神様、わたしはこれまで感情に流されてきました」と過去を悔い改めると、「何かをなすのはわたしであって、おまえではない」という神の啓示を受けました。その瞬間、神がわたしを守ってくれており、すべては大丈夫であることを心のそこから実感することができ、今までずっと背を向けていた世界が、突如として眼前に開けた、とシシリーは述懐しています。

3. 最初の恋人デビッドとの出会い

医療SWとしてシシリーは、1947年9月、29歳の時に聖トマス病院のスタッフとして、がん患者を扱う勤務につきますが、最初の恋人、デヴィッド・タスマという40歳のポーランド系ユダヤ人に出会います。ワルシャワからの亡命者、イギリスでは身寄りもなく、ウエイターをしていたデビッドは、手遅れのがんに侵され、自分の人生は無駄だったと考えていました。

シシリーは、デビッドを慰めるために旧約聖書、詩篇23篇4節「たとひわれ死のかげの谷をあゆむともわざわいをおそれ、なんぢ我とともにいませばなり(たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れませぬ。あなたがわたしと共におられるからです)」という聖句を贈りますが、「ぼくは君の心の中にあるものだけが聞きたい」というデビッドの言葉で、相手を思う詩を徹夜で考えて捧げました。デビッドの死後、遺言執行人として彼の遺品、写真、服、時計、500ポンドを受け取りますが、デビッドの残した500ポンド(当時、家一軒買えるお金)が、聖クリストファー・ホスピスの礎石となります。デビッドは、「ぼくはね、君の家の窓になるよ」という言葉を残しています。デビッドの死から3ヵ月後、休暇でスコットランドに滞在中の話です。悲しみで一杯のシシリーの心は、長いトンネルを歩き続けているような感じでしたが、ある早朝、小川のそばにすわり、小川のせせらぎ、鳥の鳴き声を聞いていると、時の流れのない今この瞬間を感じました。(デビッドもどこかにいる。デビッドは平安に、安穩である)そのことを実感して、ほっとしたシシリーの中で、何かが大きく変わりました。



最初の恋人、
デビット・
タスマ氏

4. 苦学の末に医者になったシシリー

末期患者のそばにいたい、痛みのコントロールを極めたいと願うシシリーは、聖トマス病院の外科医、ノーマン・パレットから檄を飛ばされます。「学校に戻って医学を勉強したまえ。末期患者を見捨てているのは、医者なんだ」。

この言葉をきっかけにシシリーは、1951年、33歳で医師を目指して聖トマス校医学部に学び、1957年4月、39歳で医師の資格を取得します。医者になったシシリーは、聖ジョセフ・ホスピス(1905年、アイルランドの「慈愛の姉妹会」により創設され、150床のうち40床から50床が末期患者用で、訓練を受けた修道女3人と補助員のアイルランドの少女たちが管理)で研鑽を積み、目覚ましい実績をあげます。

5. 再び死にゆく恋人と

2番目の恋人、ポーランド人のアントーニ・ミチュニビッチも末期のがん患者でしたが、敬虔なカトリック教徒、優しさ・礼儀正しさを兼ね備えた紳士で、4年前に妻と死別、娘のアンナがいました。

アントーニとシシリーの会話

「ぼくはもう死ぬの?」「ええ」「長くはありませんか?」「ええ」「ありがとう。わたしにそう告げるのは、辛くありませんでしたか?」

「ええ、辛いです」「ありがとう。聞くのは辛いけど、語ってくださるのも辛いのですね」

それからシシリーとアントーニは、手と手を取り合い、15分ほど話をしました。残された時間が短い人の貴重な時間を他人が勝手に決めてしまつてよいのか。シシリーは、アントーニを神が人間を愛するように接していました。



二人目の恋人、
アントーニ・
ミチュニビッチ氏

6. 1967年6月、

聖クリストファー・ホスピス開所

聖クリストファーは、宗教と仕事がよく融合していて、いつも誰かそこにいてくれる人が

いる場所。シシリーの第一の功績は、人は痛み
に苦しみながら死んでいく必要はないと主張
して、抗うつ剤、ステロイド、精神安定剤、モ
ルヒネ製剤を積極的に使用したこと。

第二の功績は、病気を治すことにだけに目を向
けないで、有効で愛情に満ちたケア＝全人的ケ
ア＝身体的、精神的、社会的、霊的なケアを主
張して実践し、世界中に広めたことです。



セント・クリストファー・ホスピス

シシリーは、61歳の時に結婚します。相手は
ポーランド人の画家ポール・マリアン・ブフ
ズ・ジスコ氏で、ふたりの出会いは、通りがか
った画廊のマリアンの絵（波の上を歩くキリス
ト）に心を動かされたシシリーが、その絵を購
入したのがきっかけです。出会いから17年後、
マリアン79歳、シシリー61歳の時にふたりは
結婚しました。シシリー・ソンドース先生は、
2005年7月14日に聖クリストファー・ホスピ
スで逝去されましたが、彼女の愛情に満ち溢れ
た全人的ケアの理念は、世界中の医療従事者の中
でいつまでも生き続けることでしょう。



マリアンさんとシシリーさん夫婦

編集後記

21世紀はパラダイムシフト、女性の時代です
が、死にゆく人たちのケアにたずさわり、偉大
な業績を残した人たちが、3人とも女性である
というところに深い感銘を受けます。マザー・
テレサは、36歳の時、ダーズリンへ向かう汽車
の中で、貧しい者たちのために働きなさいとい
う神の召命を受け、カルカッタにあるロレッタ
修道会経営のセントメリー高等学校の校長の
職を投げ捨てて、着の身着のままスラム街に出
て、青空教室を開設しました。神の啓示を受け
た若きシシリー・ソンドース先生が奮発して、
成長していく過程は、とても感動的です。

窓口

このレターに関するご意見、ご質問があれば
下記までご連絡ください。

kanwa-care@kchnet.or.jp

発行元： 財) 倉敷中央病院
編集委員長： 小笠原敬三 (副院長)
編集委員 (五十音順)：

- 小原和久 (薬剤師)
- 里見史義 (作業療法士)
- 白神孝子 (看護師長)
- 庭野元孝 (外科医師)
- 平賀恵美子 (歯科)